

アメリカ児童文学研究プロジェクト編

『アメリカの少女たち——少女小説を読む——』

(百合合女子大学児童文化研究センター叢書、百合合女子大学児童文化研究センター、一九九九年)

井上征剛

この論文集は、一九九六年に発足した百合合女子大学のアメリカ児童文学研究プロジェクトが、研究会の成果として刊行したものである。一九〇〇年前後に出版されたアメリカの少女小説を中心に、各論者(代表の神宮輝夫氏の統率のもと、博士課程の学生、百合合女子大学児童文化研究センターの研究員・准研究員、大学講師といった若い世代の研究者五人が七つの論文を寄せている)がそれぞれ興味ある作品を論じる、という形を取っている。神宮氏は「はじめに」の中で、この本を編集するにあたって研究書としての統一性・網羅性よりもまず議論を生み出すことを重視したと示唆している。この方法は、神宮氏のいう「これまで光の当てられることが少な

かった大衆性の強い少女小説を研究し、再評価する」という趣旨と一致するだけでなく、児童文学史の文脈で作品の意義を探ったり、作者の思想に密着したりする作業に終始したあけく外国の作品を一方的に有り難がる、という傾向に陥りがちな児童文学研究の風潮に新しい局面を開くものとして評価できる(そのような段階から始めなければならない、という児童文学研究の現状を示していることも事実だが)。そして各々の論文は、取り上げた作品について独自の視点から新たな視野を開いていこうという意図が強く感じられるものとなっている。ここでは、収められた論文を紹介し、簡単に感想を列記していきたい。

鈴木宏枝氏の「少女小説とロマン主義」は、『若草物語』(Little Women, 1868)で知られるルイズ・メイ・オールコット(Louisa May Alcott, 1832-88)の『ライラックの花の下』(Under the Lilacs, 1877-78)と、ルーシー・モード・モンタメリ(Lucy Maud Montgomery, 1874-1942)の『赤毛のアン』(Anne of Green Gables, 1908. なお、モンタメリはカナダ人だが、アメリカにおける人気と影響力から、特例として本書の対象に含まれることとなった)を一九〇〇年前後におけるアメリカロマン主義文学の推移という側面から論じたものである。まず、オールコットの作品でも『若草物語』ではなくそれほど知られていない『ライラックの花の下』に着目した点が興味を引く。最初にある作品(ここでは『ライラック』)に惹かれ、そこから別の作品(『赤毛のアン』)に、さらに少女小説全体へと関心が広がって行く、というつながりは研究の原点を明確に示しているようで共感できるものがある。また、ロマン主義の中で生まれた「子どもについての合意」が、実にほのぼのとした雰囲気を持つ『ライラック』から、ハードな現実描写で読者を驚かせる現代アメリカの児童文学にまで引き継がれている、との指摘は大変重要で、私自身にとっては現代児童文学作品の新しい読み方の指針となりそうである。一方氏が『ライラック』のどこに惹かれたのか、サーカスから逃げ出した少年がある家族に暖かく迎えられ、その家族や隣家の

子どもたちともども健全に成長していくというこの作品が、ロマン主義の流れにおける典型的な作品というだけでなくどのような光を放っているのか、ということが非常に気になるが、このことについては具体的な記述はなく、物足りない気がする。もっとも、そこまで書くとは本来の論の流れから逸れてしまいかもしれないが。

横田順子氏の「『こ遊び』のからくり箱」は、『赤毛のアン』をその人気の原点、すなわち主人公アンが物語の随所でめぐらせる想像と、彼女を囲む自然や料理や手芸といった生活の「こま」こまの書き方に注目した論である。氏は作者が想像の非現実性および有用性をひとしく強調していること、またアンが孤児院から農村に引き取られたために彼女にとって農村の「日常」が非常に特別なものであったことに注目した。その結果、想像は現実立脚した遊戯として、一方「日常」は日常を逸脱した存在として相互につながりあう、という構図が示されるのである。読者を引きつける仕掛けから入って作品の内奥に至るこうした論の組み方は、仕掛けの分析にとどまったり、いきなり核心をつつこうとして興をそいだりする多くの論とは違って、作品の面白さと真実を共に伝えることに成功している。また、そのような作品の仕組みが作品を楽しめる人と楽しめない人との断絶を生み出すという問題点に対する目配りもしっかりなされている。

林祐子氏の『小公女』におけるシンデレラ・パターンの意味も、作品の読者を引きつける部分に注目した論である。フランシス・ホジソン・バーネット(Frances Hodgson Burnett, 1849-1924)の『小公女』(A Little Princess, 1905)は大富豪の娘セーラが一瞬のうちに貧しい孤児となり困難の末に再び幸福を得る、という物語だが、彼女の不幸への忍従ぶりが作品の最大の見所といえる。この、彼女の忍従時代の住みかとなった屋根裏部屋に注目したのがこの論である。あたかも主人公の不幸を体現する場所であるかのような印象を与える屋根裏部屋が、実は日常から離れた別世界であり、主人公の「内的世界」を形成させる役割を持っていたこと、それ故に主人公に「魔法」のようなハッピーエンドが訪れたことが丁寧に論じられる。非常に説得力のある論であり、今後『小公女』を読む際には単なるセンチメンタルで都合主義の物語、という先入観にとらわれられないで済みそうである。一方、不幸な主人公が「魔法」によって突然幸福になる「シンデレラ・パターン」と内的世界の関連、というやや広範な問題点に着目した以上、論が『小公女』だけにとどまってしまうってほしいない気がした。林氏も最後に現代作品とのつながりについて触れているので、今後さらに発展した論が見られることが期待される。

高鷲志子氏の『リンバロストの森』の母と娘』は、ジーン・ストラトロン・ポーター(Gene Stratton Porter, 1863-1924)の『リ

ンバロストの娘』(A Girl of the Limberlost, 1909)を、その前半部を中心に論じている。この物語は、自分が生まれる時に父を失ったことがもとで母とうまく行かず、精神的に孤独に育ってきた少女エルノラが送る十代半ばでの生活を描いたものである。まず高鷲氏は、母のエルノラに対する冷たい態度と、エルノラが高校に入学してから見せる新たな成長をたどる。その上で、それぞれに大きく作用している「森」の存在を説く。もともと森を恐怖の対象とみなしていた母が、エルノラと同じように森に信頼の念を抱くようになることで、エルノラとの関係も修復できた、というのである。単なる背景ではなくそれ自体物語の進行に意味を持つ存在として森を位置付ける論は分かりやすく、かつ緻密に組まれており、納得の行くものであった。けれども、氏がその論と並行して詳説したこの作品での母と娘の凄まじい確執ぶりは、実のところ森についての論を上回る面白さだった。つまり、これは作品そのものへの関心を引き出すという点でも非常に印象的な文章だった。しかし、ここで伝えられた面白さと作品における森の存在意義とのつながりについて特に説明がなされているわけではないので、氏にとってのこの作品の面白さに森がどれだけ貢献しているか、という点で疑問が生じた。

高鷲氏のもう一つの論文『スパイのハリエット』再読』には、『リンバロストの森』の母と娘』を読んで私が抱いた疑

問がより明確に浮き出ている。この論は、本書に取り上げられた中ではかなり新しい部類に入る、ルイーズ・フィッツヒュー (Louise Fitzhugh, 1928-74) の『スパイのハリエット』 (Harriet the Spy, 1964. なお、邦訳タイトルは『スパイになりたいたハリエットのいじめ解決法』だが、高鷲氏はこのタイトルを、作品の本質的な部分を伝えていない、としている) を扱っている。ニューヨークに住む少女ハリエットは自分の周辺にいる人々についての自分の好き勝手な分析をノートに詳細に書きこんでいる。この「スパイ」ふりと、ある日このノートがクラスメートの手に渡ったことから生じるハリエットとクラスメートの対立やハリエット自身の心のすさまじさ、そしてトラブルからの回復が描かれた作品である。ここで高鷲氏は、ハリエットがうそを巧みに使って人間関係の修復を実行することから、「健全」に生きなくてよい、という作品のメッセージを読み取っている。しかし、氏が行った詳細な分析を読む限りでは、この作品や「健全」に生きなくてよい、というメッセージには、それほど目新しさや魅力が感じられないのである。ということとは、「健全」に生きなくてよい、というメッセージとは別のところに、この作品の本来の意義があるのではないか。そして、高鷲氏自身もこの問題を重視したらしく、論の後半では一転して作品の提示したメッセージによって主人公は本当に救われたのか、という点が中心となっている。こ

の点に関してはここではまだ着目したという段階にとどまっているが、今後『スパイのハリエット』を本格的に議論するために、この疑問から出発することが必要となろう。それは、児童文学作品の「新しさ」とは何か、についての議論がこれまでおさなりにされてきた、という問題にも通じる疑問である。

横田氏の二つ目の論文「ポリアンナの秘密」は、エリナー・ホジマン・ポーター (Eleanor Hodgman Porter, 1868-1920) の『ポリアンナ』 (Pollyanna, 1913) を扱っている。この作品は、樂觀的なヒロインがものごとを何でもいい方向にとらえること (作品ではこれを「よかったさがし」と呼んでいる) によって世の中を明るく変えて行く、という一九〇〇年前後のアメリカ少女小説の一つの典型を示している。横田氏はこの作品をとらえ直すために、ヴェラ&ビル・クリーヴァー夫妻 (Clever, Vera, 1919- & Bill, 1920-81) の『デルファ・グリーンンの奉仕』 (Delpha Green and Company, 1972) との比較を行っている。『デルファ・グリーンンの奉仕』はデルファという少女がポリアンナよろしくものごとを明るくとらえて世の中を変えようとするうちに、逆にそんな自分の在り方に疑問を持って樂觀主義を放棄するに至る、といういわば『ポリアンナ』の樂觀的かつ前向きな主人公像を覆すことを意図した作品である。この比較によって『ポリアンナ』の時代の人生観が六〇年経てば

滑稽なものに映ること、また「無垢」が主人公の「無知」や作者の「作為」と強く結びついていることが示される。さらに「文明」の対概念（罪ほろぼし、とも言えようか）であるところの「無垢」の歴史的な意味にも言及し、非常に示唆するところの多い論である。この論の延長線上には、かく「作為」的であり滑稽な「無垢」に現在でも魅かれる読者が決して少なくないことや、英米の影響を色濃く受けた日本の児童文学での「無垢」のとらえかた、といったことの考察が可能として存在しており、今後のさまざま展開につながることで重要な考え方といえる。

西村醇子氏の『親愛なる敵さん』におけるハッピー・エンドの性質」は、少女小説というレットテルに対する違和感から出發している。取り上げられているのはジーン・ウェブスター (Jean Webster, 1876-1916) の『親愛なる敵さん』 (Dear Enemy, 1915) という作品だが、これは『あしながおじさん』 (Daddy-Long-Legs, 1912) の続編にあたる (日本では『続あしながおじさん』というタイトルで出版されている)。「あしながおじさん」の主人公ジュディの親友サリーが孤児院の院長になってから送る毎日を、サリーの手紙の形で描く作品である。「あしながおじさん」は才気ある少女ジュディの物語であり、『親愛なる敵さん』がその続編であることから、双方とも少女小説として分類される傾向があるが、実際に読むと前者は大学生

活を描いており、後者は女性の仕事と結婚の物語であって少女小説という呼称は相応しくないのではないか、というのが西村氏の出発点である。そこで、『親愛なる敵さん』の少女小説らしさを確認するべく、登場する子どもたちの描写が検証される。その結果、登場する子ども数の多いものの個性を持って描き分ける意識は見られない、と氏は判断する。物語の展開において重点が置かれているのはむしろ主人公サリーのロマンスと孤児院の命運であり、物語のハッピー・エンドは人間ではなくてハードウェア (孤児院) に訪れたものである、というのが西村氏の描く作品の全体像である。つまり『親愛なる敵さん』は少女小説とは大きく隔たった中身を持つ作品であり、前編の『あしながおじさん』とも本質を異にしているわけである。西村氏も、子どもの頃熱心に読んだのは『あしながおじさん』であって『親愛なる敵さん』にはそれほど熱中しなかった、という思い出に触れているが、これは作品の性質の違いという点から続編の意味を考える契機として興味深い。単に質の善し悪しといった観点を超えた続編のとらえ方が必要だという、言われてみれば当然のことに、恥ずかしながら私はこの論を読んで初めて思い至った次第である。以上大まかに紹介してきたが、全体として、論を完成させることよりも作品の何かを発見・提示すること、また読者にも、ただ勉強してもらおうのではなく児童文学作品の読み方に

ついて新しい発見をしてみらうことに重点をおいているという印象を受けた。確かに私自身読んでいて論者の意図とは関わりなくいろいろなることを思いついたり連想したりしたので、その狙いが成功するだけの論が並べられていたのは間違いない。終わり近くになって論が急転するものも見られたが、共同研究の成果として見るならばそれはむしろ当然のことだろう。そして、ここで提示された論は今後さらに検討が重ねられて行くものと思われる。その結果どのように研究が発展していったかを是非見たい。この論文集に続く本が出されるのであれば、新しいテーマだけでなく今回発表された論文の続きにあたるものも読ませてほしいと強く思う。